

放つ。忻然として日く・今日すなはち大士の誕辰なり。そのとき一つの大亀首を挙げて高房を顧去る。春宵二月十九日の夜東の山嶺に玉兔漸く昇る。乳媪小公子を抱く。誤って水中に墮としければ高房愕然として観音を念ず。忽ち一亀かの児を負て水面に浮み微笑するを見る。高房大いに喜びて日く、信に大悲の神力少なからず。昨日亀を放つ。今日子を救ふ。何ぞ感応の速かなるや。つひに宰府に倒る。時に唐国の人僑といふもの有りて高房これに語って日く、我大悲の像を造らんと欲すれどもいまだ良材を得ず。

人僑が日く、吾本国清涼山の麓の湖中に白檀木あり。時々光を放つ。高房悦び換の黄金を人僑にあたへて国に帰らしむ。人僑既に像材を得てすなはち日本へ渡さんと官府に奏す。しかれどもこれを許さざりければ人僑その木に文字を彫って日く、梅檀香木（長三尺六寸、周四尺八寸）日本高房に寄する。かくのごとくして東海に浮かむ。高房薨じて後、黄門郎政朝（こうもんろうまさとも）また鎮西に遷り國中を巡行するに村民告げて日く、この海辺夜毎に光あり。黄門その所に至ってこれを見るに清涼の香木なり。感激殊に甚だしく、まさにこれ観自在の応驗なり。早く大悲の像を造って君父の遺意に報ずべしとて、香木を携へて京師に赴く。摂州島下郡この地に至りて暫く憩ふ所に像材重き事磐石のごとし。黄門驚いて密に祈呪して日く、もしここに縁あらは尊像成就の後この地に安ずべし。ここにおいて軽き事故のごとし。良工を択むに就いて和州長谷寺に詣しこれを祈るも七日にして大士告げて日く、明晨その人に遇ふべし。翌日果たして一人の童子鐮刀を持して来る。その形甚だ醜し。黄門問ふて日く、汝よく吾為に夫悲の像を刻まんや。童子答へて我拙工なれども君もし許したまはば彫刻し奉らん。黄門大いに喜び伴ふて京師に帰る。家人童子を視て讚して日く、この良材再び得難し。先づ他木を以て試みたまへといふ。すなはち小像を作らしむるにその貌絶妙なり。かるがゆゑに一室を構えて童子を延いてこれを造らしむ。童子日く、われ戸を閉ぢて千日に千臂を刻まん。黄門これを諾して斎戒精神する事三載、期に臨んで戸を開きこれを視るに、童子の所在をしらずして大悲の像巖然として莊嚴具足の尊容なり。ここによってまさに知らる、童子すなはち長谷観音の応化なり。尊像の靈驗いもじるし。いまだ幾ならずして黄門没去す。時に仁和四年二月四日なり。息に七男七女あり。寛平二年先父の大祥忌に値ふて遺誓あれば、今の地に宝殿を創して尊像を安ず。号けて補陀洛山惣持寺として冥福を薦めしむ。これより靈応益新なり。厥后、後小松帝寺記の宸翰を賜ふ。ここにおいて愈光耀をまし、四衆これに謁する事水の叡に赴くがごとし。

4. 総持寺境内図

